



ESSAY

～霊園に仙台ゆかりの
人をたずねて8～

小山 研二（1937～2003）

医師として心を碎いたのは、
病を得て弱る人に寄り添うことだった。

秋田大学医学部の教授として、附属病院消化器外科の医師として、激務をこなす日々だった。大手術になれば12、3時間は立ちっぱなし、その間は食事もとれない。後進の指導はもちろん、医局内の雑務まで日々肩にかかってくる。

「6時頃に帰宅して夕食をとつてから大学に戻るなんて、もう普通のこと。家族旅行なんてしたことがないし、子どもを連れて公園に遊びに行けばポケットベルで呼び出されることもあるって」と、今は亡き夫、小山研二さんとの暮らしを振り返るのは夫人の弘子さんだ。深夜12時に、先生打ち合わせを、と訪ねてくる人もあった。でも弘子さんは、夫が声を荒げたり怒ったりするのを見たことがない。人を悪くいうことも、愚痴をこぼすこともなかつたという。

いつも気にかけていたのは、自分が手術を行った患者さんたちのことだ。「手術後の小さな異変に気づき早く処置すれば、術後の経過は格段によくなる」と話し、こまめに病室をまわり症状を見守った。そのときも、教授が部下を連れて病室をまわる総回診は行わず、一人ふらりとベッドを訪ねる。病をかかえ弱っている人への深い思いやりがあったのだろう。自分が“教授”とよばれることも嫌つたという研二さんの座右の銘を、弘子さんが教えてくださる。

「力をいったために己が傲慢になるとき、詩は己の様々な限界に気付かせる。力をいったために己の視野が狭まるとき、詩は人生の豊かさと多様性を教える」。

「詩心」と題されたJ・F・ケネディの言葉だ。「詩心」とは、目の前の日々の暮らしの向こうに広がる想像力の世界を忘れないでいるということかもしれない。



今、弘子さんは「僕にはストレスがない」と、研二さんが常々口にしていたことを振り返る。「あんなにストレスだらけなのに、“ない”と自分にいい聞かせて、それは二重のストレスよね」

2002年、秋田大学を定年退官し仙台赤十字病院長に迎えられてわずか2カ月後、研二さんは体の異変に気づく。自分の部下だった医師のもとで検査を受け、すぐに手術となった。奇しくも、自身が専門としてきた消化器のガンだった。それでも治療を続けながら、病院内に医療安全管理室を設け、医学部卒後研修の指定病院をめざすなど、約1年半にわたって院長としての仕事をこなしていく。

弘子さんとは、墓地や墓石を見て歩いたという。「そう長くない先に亡くなることはお互いわかっているのに、私は何だか別荘でも買いつにいくような気分でいて…」医師として自分の病の進行を自覚する中、夫人の明るさや届託のなさに救われる闘病の日々だったのでないだろうか。故郷である信州の山並みに風景が似ているから、と墓地を決めたのだそうだ。

いつも的確な言葉でまわりの人を励ましたという研二さんは、最後の入院の朝、弘子さんのベッドのわきにそと手書きのメモを置いていった。「弘子さん、ありがとう。よく眠ってね」そのメモは残された弘子さんの毎日を、お守りのように支え続けている。享年66歳。

(取材・文／西大立目祥子)



2002年12月、仙台赤十字病院のクリスマスコンサートでいさつする小山研二さん。自分が治療を受けながら、院長としての仕事をこなしていた。墓碑は12区。

西大立目 祥子(にしおおたちめ・しょうこ)

フリーライター。地元学の視点で仙台のまちや広瀬川について執筆している。著書に『仙台まち歩き』(河北新報出版センター)。